緑地帯

野島 透

山田方谷の夢実現へ ⑥

江戸時代の貨幣は金貨、銀貨、銅貨から成り立っていたが、その鋳造は徳川幕府の独占事業であった。各藩はその代わりに紙幣である藩札の発行が認められていた。もちろん兌換(だかん)紙幣であることが条件で、当時の藩札の正貨との兌換レートは忠臣蔵で有名な赤穂藩の60%が最もよく、8代将軍吉宗が生まれる前の紀州藩が宝永4(1707)年に発行したものなどは20%であった。山田方谷が財政再建する前の備中松山藩の藩札は「貧乏板倉」といわれ、全く信用のないものだった。

方谷は決断した。3年間という期限を区切って紙くず同然の藩札を正貨に交換するとのお触れを出した。回収された藩札は当時の藩の財政規模の2割に当たる。嘉永5(1852)年、方谷は回収した藩札を、高梁川の河原で朝の8時から夕方の4時までかかって焼却した。多くの農民が弁当を持って見学した。このパフォーマンスの効果もあって新しい藩札は抜群の信用を得て、他藩の領内まで流通するようになった。元日銀総裁の故三重野康氏がこの政策に感激して「貨幣は国民に信頼されなければいけない」と私に語ったのが印象的である。

方谷は節約政策を打ち出したが、対象を中級以上の武士と豪農、豪商に限定したことが特徴的である。これが下級武士や一般の農民から方谷の政策が支持された理由の一つである。また方谷自身も開墾を奨励し、城下からはるか離れた土地(現在のJR伯備線方谷駅あたり)に移り、開墾をするなど自らも実践した。

(財務省大臣官房会計課長=東京在住)